

壱岐島で、「生まれた子牛が乳を飲まない」との往診依頼があったときにまず行うのは「浣腸」でした。病名は胎便停滞（たいべんていたい）です。

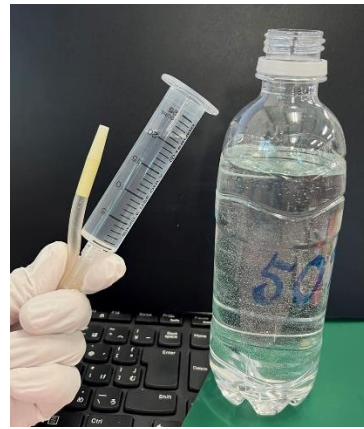
壱岐ではほとんどが母子同居であり、母乳で育ちます。ですから新生子牛は初乳を自力で飲む必要があり、飲まないとなると一大事です。農家の方は一生懸命になって子牛に乳首を吸わせようとします。乳首に砂糖や蜂蜜を塗ったり・・・しかし母牛（特に初産）には子牛を嫌がって吸わせたがらない牛もいます。そのような母牛には、・・・ある種拘束をすることもありました。設備的なものを考案したこともあります（母牛ゲート 1.2 下記ご参考まで）。

一方で、子牛の不調で飲まないこともあります。難産で不調のこともあるでしょうし、羊水を吸引してしまったこともあるかもしれません。そのような原因が分かって分らなからうが、とりあえず行う処置内容が浣腸です。浣腸が奏功する（その場で胎便が出る）と、子牛はスッキリした表情になり、すぐに乳首に吸い付くことを度々目撃しました。便通が滞ることが気を減らせることは薄々知ってはいたものの、“劇的反応”です。で、ここからは私の思考ですが、であれば、生まれた子牛全部に“とりあえず浣腸”を行ってみてはどうでしょう・・・馬の世界では、オスは骨盤が狭いので、“とりあえず浣腸”するようです。ですから悪いことにはならないでしょう・・・むしろ初乳の飲みが増える可能性もありそうです。

では、浣腸の方法ですが、物理的刺激と化学的（薬物）刺激があります。物理的にするときには体温計とか、先の丸いマドラーのような棒を使いますが、直腸を傷をつけないか心配になります。私がやっていた方法は50%グリセリン（水で倍にする）を使う方法です。



かの有名な「イチヂク浣腸」も50%グリセリンです。私のおすすめは、補液管の先を抜き取り、10 cmカットして、特別な先のシリンジに取り付けます（カテテルチップ）。これを直腸内にゆっくり入れ、薬液は結構強めに（遠くまで）とどけます。



ということで、へその消毒と、浣腸は、とりあえず行う方向で、、、

（グリセリン 500 ml : 40 頭分 1,600 円 / カテテルチップシリンジ 25 ml : 120 円）

先日酪農学園大学で行われた勉強会で、宮崎 NOSAI の上松瑞穂獣医師は、生まれて 10 日頃の子牛に、成牛（親子関係は不問）の第一胃液を 10 ml 1 回移植（注射器で子牛の口から飲ませる）すると、見違えるほど子牛の体調が良くなると紹介してくれました。



母牛ゲート1



母牛ゲート2